

# 平成27年度第2回奈良県学校・地域パートナーシップ事業

## 地域コーディネーター連絡会 実施報告

- 1 日時 平成28年1月31日(日) 9:30~11:30
- 2 会場 香芝市中央公民館 第5・6研修室
- 3 参加者 県内学校・地域パートナーシップ事業 地域コーディネーター 計 36名
- 4 内容 9:30~9:35 開会  
9:35~10:05 講演「地域コーディネーターの活動の充実のために」  
奈良県学校コミュニティ・コーディネーター 有田 佐  
10:10~11:25 情報交換・意見交流  
11:25~11:30 閉会



### 5 講演概要

#### 1. 学校と地域の協働(子どもたちの課題解決に向けてともに活動すること)がうまくいっている取組

- 異なる年齢の人々と交流する取組・命や福祉を考え、自尊感情を育むことにつながる。
- 伝統行事、伝統芸能等を体験する取組・地域の人々に営々と受け継がれてきた心にふれることができる。
- 授業等で教職員とボランティアが協働する取組・たとえば、小学校の英語の授業では、ボランティアが支援者ではなくパートナーとして活躍することにより、授業の質を高めている。
- 子どもの安心を育む取組・たとえば、登下校の見守りや昔遊びの体験では、子どもと高齢者の間に心のふれあいが増深してきている。

#### 2. コーディネーターの悩み・克服しなければならない課題

- ボランティアの人材不足やスタッフの固定化・高齢化。
- 特定の人に重い負担がかかり、その方が疲弊してしまう。
- 学校の「敷居の高さ」を感じる方がいる(地域の方が学校に入る際、学校側から抵抗感をもっているように感じる)。

#### 3. 学校の「敷居の高さ」の背景にあるもの

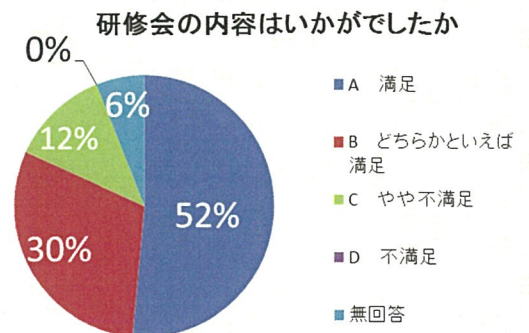
- 学校は繊細なプライバシーに関わる問題を抱えているので、時として外部に対して閉鎖的になることがある。
- 学校には自主性・自立性を重んじる風潮があり、それが地域の方にとって「敷居の高さ」と映る。

#### 4. 諸課題の克服に向けて大事にしたい視点

- 学校とボランティアが互いに信頼し、協働することを大切にする。やがて、両者が課題を共有できるようになり、克服につながっていく。

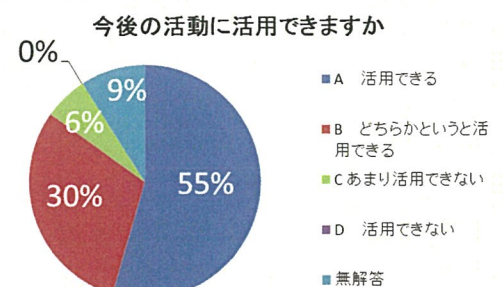
#### 5. 今後の課題

- ① 今後も普及・啓発活動を継続させていく。 ② コーディネーターの役割を充実させる。 ③ コーディネーター同士が情報を共有し、ネットワークを構築する。 ④ 組織化・推進体制づくりを行う。 ⑤ 地域の実態・地方創生の観点をふまえる。



### 6 情報交換

- ボランティアが活動する写真や報告書を学校に掲示して啓発することが、学校の「敷居の高さ」を克服することにつながっている。
- 登校する児童の様子で気になったことがあれば、ボランティアが学校に連絡している。これにより、学校とボランティアの距離が近くなってきている。
- 中学校では、職業体験でボランティアが活躍しているところがある。また生徒・教職員・ボランティア三者と一緒にカーテンの洗濯・修繕しているところもある。みんなが喜んで活動することが大事なことである。



### 7 参加者の感想より

- 地域により、様々な活動があることを知った。みなさんの子どもたちへの愛情を強く感じた。
- この事業が盛り上がることで、子どもも学校も地域も元気になるのではないかと。学校と地域が互いに尊敬して、信頼し合える関係になることが必要である。



## 「地域コーディネーターの活動の充実のために」

奈良県学校コミュニティ・コーディネーター 有田 佐

## 1. はじめに

## 2. 「地域とともにある学校づくり」県内の取組の現状

※取組の深化・充実→県内各地で実に多様な取組が展開されている。

## (1) 変化の様相

- ① 組織化が進む
- ② コーディネーターの配置
- ③ 様々な団体との多様な連携
- ④ 普及啓発の進展と理念理解の浸透

## (2) 変化の印象

- ①協力・支援から学校教育内容の更なる充実に向け積極活用へ
- ②「協力・支援」から子供や学校の実態を踏まえた「課題の共有」へ  
「連携の継続」から「共有と協働」へ。

## 3. 特徴的な取組として

- ①異年齢集団との交流
- ②地域の歴史・文化に根差す、子供たちのスピリチュアル体験
- ③教員とボランティアによる協働の取組
- ④子供の安心を育む関係づくり→単なる支援から、人間的交流・ふれあいの深まりへ

## 4. 悩み・問題点・克服すべき課題等

- ①人材不足、スタッフの固定化・高齢化
- ②頑張っているが、誰か・どこかが疲弊 ※コーディネート機能不全
- ③学校の敷居の高さ・地域との間にある垣根

## 5. 敷居の高さの背景にあるものとして

- ①今学校現場では  
・いじめ、不登校、非行、校内暴力、学級崩壊、学業不振、学力低下、活字離れ、  
他

- ・地域崩壊、少子高齢化、経済格差、貧困家庭、機能不全家族、引きこもり、等々
- ・「世界一多忙」といわれる日本の教育現場。精神疾患による退職、休職教員数は高水準を維持。

## ②学校文化としての閉鎖性

## 6. 克服に向けて大事にしたい視点

### ①「もう一つの好循環」→学校とボランティアの信頼と協働の好循環

→子供たちの現実から成長を実感すること。「来てよかった」「来てもらってよかった」の双方の実感が相互の信頼を生む。

### ②課題の共有

→互いの実感を通して育まれる「信頼と協働」の好循環の中での取組の積み重ねこそが、子供一人一人を見据えての、「願いの共有」であり、「課題の共有」は自ずと生まれてくる。

## 7. 今後の具体的課題として

### ①継続した普及啓発努力

### ②コーディネート機能の充実

### ③情報の共有とネットワーク

### ④組織化・推進体制づくり

### ⑤地域の実態・地方創生の観点をふまえた取組の方向性

#### ※国の「学校を核とした地域力強化プラン」

「学校を核として地域住民の参画や地域の特色を生かした事業を展開することで、まち全体で地域の将来を担う子供たちを育成するとともに、地方創生の実現を図る。」

- ・地方創生の実現を視野に
- ・子供の状況に配慮した支援の充実
- ・コーディネート機能の強化

→「地域コーディネーターの配置促進及び機能強化、地域コーディネーター同士のネットワークづくり、総括コーディネーターの配置」

## 8. おわりに

※ある大学の機関紙 [グローバル社会に必要な力とは]

グローバルリーダーに必要なもの

→「価値観が異なる人と相互理解を育むことができる能力と魅力があって、信頼される人間力」